

術のバリエーションとが含まれている。今回、演者らが試作した経頭蓋撮影専用の顎関節部X線規格撮影装置は少なくとも同程度の再現性を有するものと確信している。

演題2. 接着性レジン¹の臨床応用について

第1報 4-META含有接着性レジンの臨床応用

○雪田 卓志, 岩本 一夫, 戸田 慎治,
渡辺 雅江, 根本 秀樹, 金森 敏和,
田中 久敏

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第一講座

近年の高分子化学の急速な進歩に伴って、歯科医学のあらゆる分野において、接着性レジンの研究ならびに開発がなされ、臨床においても多方面にわたり応用されている。本教室においても、“陶材とレジンとの接着”について、以前より基礎研究ならびに臨床応用を行い、過去数回にわたり、日本補綴歯科学会等において報告している。今回は、更に“陶材、歯質、金属”の三者に接着するレジンの開発の検索にあたり、歯質と金属に強固に接着する4-META含有接着性レジン¹を臨床的に応用し、咬合の改善ならびに審美性の回復をはかり、次のような結果を得た。

- 1 少数歯欠損において、4-META含有接着性レジンを用いた、Adhesion bridgeは、その適応症、デザイン、および術式等を十分に考慮すれば、最少限の歯牙の削除にとどめることができ、咬合の改善ならびに審美性の回復をはかることができた。
- 2 抜歯を余儀なくされた症例において、床用レジンである、4-META含有接着性レジンを使用し、使用中のCo-Cr金属床に増歯を行った場合には、特別な保持機構を与えなくても、シジンと金属の接着は強固で、その保持力は十分に機能に耐えることができた。
- 3 接着という概念を歯科医療に導入することは、これからの歯科医療の技術革新に大きな役割を果たすものと考えられ、さらに、今後の材料学的研究並びに開発が不可欠のものと考えられる。

質 問：亀田 務(理工)

歯冠修復物の支台歯への接合については、接合層の弾性係数が、接合強さを決定するとも云えるので、そ

の点有機系接着材の応用は接着層に大きな応力集中を来す危険があると考えらる。

回 答：岩本 一夫(補綴I)

4-META含有接着性レジン¹は在来のセメント類と異なり、疎水性素材であり、有機質高分子であるために耐水性に優れ、機械的強さが格段に勝っている。これらのことより、充分に歯科用接着剤として有効と考える。

演題3. 感染根管治療における予後不良2症例の報告

○遠藤 修, 齋藤 裕志, 村上 直美,
八幡 昌介, 鈴木 鐘美*

岩手医科大学歯学部歯科保存学第一講座

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座*

歯内療法が失敗に終る原因としては、全身の因子および局所的因子、またはこの両者が組み合わさったものによって引き起こされると考えられる。局所的因子、特にその内の技術的な因子としては、不完全な根管の清掃、拡大、形成や不完全な根管充填等がある。また歯周組織内における慢性炎症、即ち、肉芽組織やう胞の存在も失敗の一因と考えられる。今回我々は、通常の根管治療を施しても、臨床症状が改善されなかった2症例について最終的に根尖切除術を試み、その予後と根尖部の病理組織学的検索を行なった。2症例のうち、症例1は歯根のう胞と診断されたが、症例2は根尖部軟組織が一部しかなく病理診断は確定できなかった。症例1においては根尖部セメント質内に多数の亀裂が見られ、その内部に深く潜在する細菌感染に対して歯内療法の効果がおよばず根尖部の治療経過が不良になったものと推察され、一方、咬合性外傷の存在も原因の一つと思考された。また症例2においては根尖部硬組織のH. E. 染色標本より、G. P. が根尖部につき出ている所見から、G. P. の機械的刺激やその他糊剤等の化学的刺激により症状を呈したものと考えられた。以上のことから通法の根管治療後の経過が思わしくない場合は、cyst formationや、根尖部硬組織内部の感染等も考慮して、根尖搔爬や根尖切除、減圧療法等の外科処置とその併用療法を行なうことによって治療を期待することが出来るものと思われる。

演題4. 昭和57年の本学歯学部付属病院における病理